

タイ国における現地理解と日本理解を考える教育活動の実践

前泰日協会学校バンコク校（バンコク日本人学校） 教諭
愛媛県西予市立多田小学校 教諭 松 末 強

キーワード：在外教育施設、バンコク、現地理解、日本理解、小学校

1. はじめに

現地理解教育を子どもたちにすすめていくに当たり、授業の中で日本の教科書を扱いながらタイのことをどのように取り扱うのかが、大きなテーマであると感じた。日本人学校に通う子どもたちの生育歴や生活経験は様々であり、生まれてからタイに住んでいる子どもにとっては、日本の文化に触れる機会はあまりない。また、保護者の海外赴任期間は3年から5年が目安のため、転出入が頻繁に行われており、タイに来て間もない子どもも多い。このような多様な生活経験をもった子どもたちが在籍する本校にとって、タイについて学習するとともに、日本の文化にも触れさせることは大変意義深いことであると考えている。

そこで、教育活動全般において、タイと日本のつながりを調べたり、違いを発見したりしながら、お互いの国の文化や伝統、産業などに興味・関心がもてるグローバルな児童の育成に努めていきたいと考え、本テーマを「現地理解と日本理解を考える教育活動の実践」とした。授業実践は小学校第5学年で行った。

2. 各教科等での指導実践

(1) 国語科の学習

①季節の言葉

光村図書の第5学年の国語の教科書には、季節の言葉の単元で清少納言の「枕草子」がある。これをもとに、それぞれの四季の時期にこの単元を取り上げ、情景を詩と絵で表す活動を行った。以下が子どもたちの作品例である。

- ・春は一時帰国。おじいちゃん、おばあちゃんに会って楽しい毎日。帰るとき空港へ行ったらさみしい気持ち。
- ・春は日本。コンビニでおにぎりを買う。公園へ行く途中はぶるぶると震える寒さ。花粉もすごい。でも、公園で食べるおにぎりは最高にうまい。
- ・夏は夏祭り。浴衣着ている人々と盆踊り。太鼓の音がドドンと聞こえる。屋台で買ったかき氷。友達と食べる暑い夏の夜。
- ・夏は花火。いろいろな種類ですごくきれい。次はどんな花火が上がるかな。でも、最後の花火の後は少しさみしい。
- ・秋はもちつき。きねを持ったらおとと。冬が近づき寒くなる。寒さに負けずにどっこいしょ。
- ・秋は紅葉。いちようやもみじの仮装会。オレンジまん丸、カボチャみたい。トリックオアトリート。君もハロウィン入りたい？

②作品から分かる子どもたちの感覚の違い

作品を作りながら感じたことは、海外生活者ならではの感覚があることと、日本の四季や行事の感覚が薄い児童がいることである。上記の作品例でも分かるように、春休みが長期間のため一時帰国者が多く、祖父母との出会いや春の肌寒さを感じるようである。作品の中には日本の桜やタイのゴールデンシャワー（タイの国花）を選んでいたり、タイの有名な祭りであるソンクランを取り入れていたりする児童もいた。そして、夏はおおむね日本と季節が同じであるため、大きな違和感はなかった。しかし、秋になるとタイでの生活が長いいためか、日本の記憶が薄れ餅つきの時期が秋になっている児童がいた。ハロウィンを選んでいる児童も多く、異文化を受け入れている様子が伺えた。

このように、子どもたちの四季に対する感覚は様々であることが、よく分かった。さらには、日本各地からバンコクに来ているため、その土地の習慣や行事ごとにも多少の違いを感じることもあった。

(2) 社会科の学習

①日本と違う気候

5年生の社会科の学習では、主に日本の国土と産業について学んでいく。最初の学習では、日本の気候から学習が始まる。日本の天気予報を聞いたり、季節感を肌で感じたりする経験が非常に少ない子どもたちにとっては、想像が難しい。大きな災害の時にはニュースになるが、梅雨の時期が長い地域があったり、夏に雨があまり降らない地域があったりと、地域によって気候が変わる感覚が低い。しかしながら、自分たちが住んでいるバンコクについて振り返りながら学習を進めることで、その土地の気候にあった生活の仕方があることに気づき、日本の様々な土地の暮らし方にも興味をもてるようになってきた。

②「低い土地の人々の暮らし」

例えば、「低い土地の人々の暮らし」では、バンコクのことを例に挙げ、洪水から身を守るための工夫を見付けることができた。チャム臨海学校で訪れたタイの昔の家は高床式になっている。(写真) また、BTS(スカイトレイン)の駅に上がるエスカレーターの最初は石段になっており、万が一洪水になってもエスカレーターまでは届かないようにしている。



反対に、平地と豊富な水を利用して生活に生かしている物もある。市民の足として使われている運河を利用した水上ボートや観光用の水上マーケットなどである。このように、現在住んでいるタイと比較しながら学ぶことで、子どもたちの関心も高まる。

③工場見学で日本とのつながりを学習

産業の学習では、「自動車をつくる工業」について学んでいく。校外学習ではトヨタ自動車工場へ見学に行くため、日本で学習することとほぼ同じように学ぶことができる。ただし、「なぜ海外に工場があるのか」という視点については、実際の質問を通して、知ることができる良い機会である。タイではトヨタの工場が3つあり、タイ国内向けの車の製造と、タイ国外向けの車の製造を行っていることが分かった。さらに、日本にも輸出していることに驚いている様子であった。これからトヨタ自動車として、持続可能な地球環境を保っていくことが私たちの幸せにつながっていくことであり、その助けができれば良いという考えのもと、自動車づくりを行っていることを理解したようである。

(3) 特別の教科道徳

①伝統と文化の尊重・国や郷土を愛する態度

7月に「伝統と文化の尊重・国や郷土を愛する態度」を価値項目とした授業を下記の通り実施した。タイに住んでいる私たちにとって、日本とタイの文化を知り、それを受け継いでいくことは、とても大切なことであることを感じる事ができた。そして、タイのことをしっかりと学び、日本人に伝えていきたいという気持ちをもつことができた。



②国際理解・国際親善

9月にはタイの現地校との交流学習会が例年開催されている。その会に向けて行った道徳の授業は「折り紙大使」を資料にした「国際理解・国際親善」を価値項目にした題材である。子どもたちの振り返りシートには、以下の様な感想が書かれてあった。海外だからこその体験を、ぜひ楽しみながらしてもらいたいと感じた。

- ・ 今度の交流学習会では、タイの友達に日本の文化である折り紙を教えてあげたい。
- ・ 交流学習会では、福笑いを一緒にしたり、習字を教えてあげたりしたい。
- ・ 言葉は分からないかもしれないけれど、一緒にスポーツをして楽しみたい。
- ・ 習ったタイ語で、タイの友達と交流してみたい。
- ・ たくさんの人と名刺交換をしてみたい。
- ・ 初めてなので不安だけど、がんばります。

(4) 総合的な学習の時間

①現地校との交流学習会

9月19日にタイの現地校との交流学習会が行われた。例年行っているため、複数年の間本校に通っている児童にとっては、とても楽しみにしていることが分かった。今年編入した児童にとっては、やや不安があるようであった。しかし、会に向けて準備を進めるに連れて、徐々に楽しみに変わっていったようである。

②授業参観での発表

また、2学期中旬からは、交流学習会を踏まえた上で、「～同じ空の下つながれ泰日の友好の架け橋～泰日友好親善大使になろう」というテーマで、調査し、発表する学習活動を行った。調べた内容は(地理・花・料理・遊び・音楽・スポーツ・お菓子・お土産)である。タイのものと日本のことを比較しながら、その違いや共通点について発表をしていった。授業参観での発表だったため、保護者からの感想もいただいた。その中には、「タイに住んでいても知らないことがいくつかあった」「日本のことを再認識できた」などの感想もあった。

今後、タイの友達との交流場面や日本に帰国した際に今回学習したことを生かしてもらえるとありがたいと願う。

3. おわりに

授業を行う中で、やはり身近なタイのことを提示すると、子どもたちの関心は非常に高まると感じた。また、日本の伝統や文化については、伝えていかないと薄れて行ってしまうことを感じた。様々な教育課程の中で、グローバルな人材を育てるためにも、現地理解教育を子どもたちと一緒に調べ、考え、学んでいくとともに、日本のことについても触れながら学習を進めていかなければならない。これからの派遣教員に期待をしたいと願う。